国際医療福祉大学
2011年8月20日発行
発行：学校法人国際医療福祉大学　☎0287-24-3000
ホームページアドレス：http://www.iuhw.ac.jp/

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. 86
August 2011

平成23年度
学部入学式並びに大学院入学式
平成23年度新入生概要／学長式辞／新入生誓いのことば

第16回 大田原キャンパス運動会

IUHW International University of Health and Welfare vol.86 August 2011

CONTENTS

2 平成23年度 学部入学式並びに大学院入学式
新入生概要・学長式辞・新入生誓いのことば

4 第16回 大田原キャンパス運動会

5 小田原キャンパスレポート 第19回

6 福岡天神キャンパスレポート 第9回

7 大川キャンパスレポート 第23回

8 塩谷看護専門学校キャンパスレポート 第1回
【コラム】私の主張　第19回　塩谷看護専門学校教務主任 砂川かおる

9 Topics & Columns
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社奨学金 奨学生認証式／視機能療法学科・新入生歓迎会・学科交流会／薬学部・白衣授与式／チョーライ病院との協定締結／日本哺乳動物卵子学会開催／中央臨床研修委員会・研修医合同オリエンテーション開催／山本澄子教授・平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の科学技術賞（開発部門）受賞／平成22年度学校法人国際医療福祉大学決算報告

11 施設インフォメーション
国際医療福祉大学病院／国際医療福祉大学塩谷病院／国際医療福祉大学三田病院／国際医療福祉大学熱海病院／山王病院・山王メディカルセンター／化学療法研究所附属病院／高木病院・福岡山王病院／介護老人保健施設マロニエ苑

16 震災関連ニュース

18 国際学生学術論文発表会レポート／卒業生・留学生通信

19 学生投稿ページ 06 震災ボランティア活動

20 医療福祉 e チャンネル

平成二三年度 学部入学式並びに大学院入学式

国際医療福祉大学　大田原キャンパス

期日　平成二三年四月一一日（月）
会場　那須アスリーナ一階

祝辞をいただいた来賓の方々

言語聴覚分野　金子忍さん

看護学科　岩間晴香さん

式次第

開会の辞
校歌斉唱
式辞
・北島政樹学長
・金澤一郎大学院院長
理事長挨拶
・高木邦格理事長
来賓祝辞
・大田原市長　津久井富雄様
・那須郡市医師会長　鈴木潤様
・みんなの党代表　渡辺喜美様
新入生誓いのことば
学部長・学科長紹介
閉会の辞

平成23年度新入生概要

■学部　一四三九名

【大田原キャンパス】
保健医療学部　一〇〇〇名
□看護学科　一一九名
□理学療法学科　一〇三名
□作業療法学科　一〇三名
□言語聴覚学科　九八名
□視機能療法学科　五一名
□放射線・情報科学科　一一九名
医療福祉学部
□医療福祉・マネジメント学科　一八九名
薬学部
□薬学科　一九八名

【小田原キャンパス】
小田原保健医療学部　一五九名
□看護学科　五七名
□理学療法学科　五八名
□作業療法学科　四四名

【福岡天神キャンパス】
福岡看護学部名
□看護学科　一〇三名

【大川キャンパス】
福岡リハビリテーション学部　一七七名
□理学療法学科　八八名
□作業療法学科　四七名
□言語聴覚学科　四二名

■大学院　二七〇名
医療福祉学研究科　二六九名
□修士課程　保健医療学専攻　一二五名
□修士課程　医療福祉経営専攻　五八名
□修士課程　臨床心理学専攻　二五名
□博士課程　保健医療学専攻　六一名
薬科学研究科
□修士課程　生命薬科学専攻　一名

学長式辞（要旨）

北島政樹 学長

本日ご出席の皆様は入学の喜びと震災の悲しみという複雑な気持ちでご参加されていると思います。今から一カ月前の震災は多大な被害をもたらしました。犠牲者の方々には心より哀悼の意を捧げます。また、被災者の皆様には一刻も早く救助の手が差し伸べられることを祈念しております。

こうした厳しい状況下、また、自粛ムードの中で、皆様は日本を元気にしようという強い心意気を持って本日の入学式に臨まれたことと思います。心から入学をお祝いすると共に、今日まで物心両面から支えてこられたご家族、関係者の皆様にもお祝いと敬意を表します。

いまや日本は他の諸国が経験したことのない高齢化が進み、人口の一／五が六五歳以上の高齢者となり、平成二一年の高齢化率は過去最高の二二・七％となっております。皆様はこのような人口構造の逆転という大変動の時代を生きることになりますが、ぜひ夢と勇気と希望をもって、この国際医療福祉大学という学び舎で知識と技術を学び、医療福祉の先導者となることを教職員一同期待しております。

母校というのは、ここで学んで本当に良かったという学び舎であり、楽しみが溢れ、輝きに満ちた場所でなければなりません。サークルやボランティア活動で多くの友人を作ると同時に、学業以外に真に打ち込めるものを発見することが必要です。このたびの震災における君たちの先輩のボランティア活動は見事であり、高い評価を受けました。私は彼らを誇りに思っております。これまで持ち続けてこられた夢と勇気と希望をもって、本日ここに学生生活の新しい一歩を踏み出していただきたいと思います。

新入生誓いのことば（抜粋）

私たちは本日ここに国際医療福祉大学の新入生として入学できたことを大変うれしく思い、これからの大学生活への夢と希望で満ち溢れています。そして私たちが国際医療福祉大学に入学できたのは先生、友人、家族の支えがあったからだと実感し、感謝の気持ちでいっぱいです。

保健医療学部看護学科　岩間晴香さん

本日は未曾有の大震災の中にも関わらず、私たちのために心温まる入学式を挙行していただき、誠にありがとうございました。北島学長、金澤大学院長をはじめご来賓の皆様より温かいご祝辞と励ましのおことばを承り、大学院新入生を代表して心よりお礼申し上げます。

医療福祉学研究科　修士課程　保健医療学専攻　言語聴覚分野
金子忍さん

フレッシュマンキャンプ

五月二一日（土）～二二日（日）、本学部の新入生を対象とした「フレッシュマンキャンプ」を開催した。

一昨年まで「学外オリエンテーション」という名称で小田原市近郊の施設で日帰りで実施していたが、今回は大田原キャンパスと今年一月にオープンした那須セミナーハウスを利用した。小田原キャンパスの学生は、本学発祥の地である大田原キャンパスを知らずに卒業していく学生がほとんどである。

大田原キャンパス到着後、北島学長の歓迎のあいさつを聞き、その後、カフェテリアで昼食。小田原キャンパスにはない学生食堂、不慣れな部分があったものの、初めての学生食堂を楽しんでいるように見えた。

昼食後は、二二グループに分かれ、広大な大田原キャンパス構内を利用してのクイズラリーを実施。各グループに大田原キャンパスの学生会の学生が一名ずつ付いて、学内を案内してもらいながらキャンパス構内を練り歩く。開始前には元気だった学生も、終了時には歩き疲れている様子も見て取れた。

セミナーハウスでの集合写真

クイズラリー終了後、那須セミナーハウスへ移動。大田原キャンパス交響楽部の演奏による歓迎セレモニーを開催。演奏の最後には、バスで練習をした校歌『未来への扉』を演奏に合わせて歌った。

夕食後、会場を二つに分けてグループディスカッションを実施。各自テーマに沿って真剣に討議を行っていた。

二日目こそ雨に降られてしまったが、学生から、『来年も参加したい』、『他学科の学生や、大田原の学生と交流が持てて良かった』との声が多く聞かれた。改善点も挙がっており、次年度以降の参考にしたい。

最後にフレッシュマンキャンプ開催にあたり、ご協力いただいた大田原キャンパス各部署の方々へ御礼を述べたい。

（学務課　下田岳史）

グループディスカッションの討議風景。クイズラリーの景品を手にして笑顔も

地域との交流・地域への貢献

開学六年目を迎え、小田原キャンパスが行っている地域との交流・地域への貢献についてお知らせしたい。

①市民公開講座

地域貢献事業の中で、市民に定着しているのが、春と秋に実施している市民公開講座である。六月五日に開催した第六回市民公開講座は、実行委員会を組織し、一年生が来校される市民の受付、案内を担当し、二年生が教員と展示物を作り、説明を担当した。一年生は事前に、東京事務所の別府チーフインストラクターのマナー講習会を受け、①挨拶と返事②服装と身だしなみ　③敬語、言葉遣い④挨拶の仕方　などを学んだ。今年は二五二名と過去最高の参加者を数えたが、事前講習の甲斐あってか、多くの市民から学生の態度を褒める言葉をもらった。

②かながわコミュニティカレッジ

今年は神奈川県主催の「かながわコミュニティカレッジ」に参加し、横浜市で保健・医療・福祉分野を中心とした災害ボランティア育成講座全六回を開催する。この計画は東日本大震災の起こる前に予定されていたが、震災発生後、県民の関心は高く、横浜市だけでなく、小田原市でも同じ内容の講座を計画している。小田原市は江戸時代以降周期的に大地震に見舞われた記録が残っており、大正時代の関東大震災後、次の周期としてそろそろ神奈川県西部地震の発生が恐れられている土地柄から、市民にとっても高い関心事であり、地域貢献として大きく評価できると思われる。

③大学発・政策提案制度

神奈川県が、県内の大学から県政に関わる政策を募集し、公開コンペ方式による審査により、選ばれた提案を大学と県が協働して事業実施する「大学発・政策提案制度」へ六件提案した。県職員による予備審査の後、八月二二日に黒岩神奈川県知事出席のもと公開コンペが開催されるが、採択されれば、大学の知見を地域行政に生かす試みとして、大きな地域貢献の一つとなる。

④研究業績紹介冊子発行

小田原キャンパスの教員が地域の方々のニーズに応えて、学外で活躍することも地域貢献の一つと考え、全教員の研究テーマや今研究内容を『私たちの知識、お役立て下さい』というサブタイトルのもと、一冊の冊子にまとめ、昨年度から小田原近郊の公共機関、小中学校、市民団体、福祉施設・団体に配布している。この冊子をきっかけとして、教員への講演依頼や質問が寄せられるなど、多くの反響があった。

⑤東日本大震災の被災者への義援金

東日本大震災の被災者に対し、本学部の卒業生が謝恩会を取りやめ、その経費を被災者に義援金として贈ることが新聞や小田原市の広報誌、地域のタウン誌に取り上げられた。このことは、共に生きる社会の実現を目指す本大学の理念を、卒業生の意識がみごとに実現したよい出来事と言える。この義援金は、小田原キャンパス内の被災学生（家屋の全壊）一人と、国際医療福祉大学全体の被災者に、さらに全国の被災者に届くよう日本赤十字社へと三カ所に分けて配分された。

小田原キャンパスは、これからも社会に開かれた大学であると地域社会に認められるよう、地域と共に、また地域のために多くの事業に積極的に取り組んでいきたい。

（学務課　高久晃）

開会式で選手宣誓をする小林里織さん（看護学科1年）。
ここで問題。この不自然な左手のわけは？
①ただの癖　②胸やけ　③カンニング
答えはこのページの下に。

準備の整ったグラウンドを横目に、プログラムを雨天用に切り替えて、体育館で応援合戦のみの実施となった。

5月28日、大田原キャンパスで第16回運動会が行われた。ただ、今年はあいにくの雨。

最後に華やかにＳＴを書き上げた言語聴覚学科。

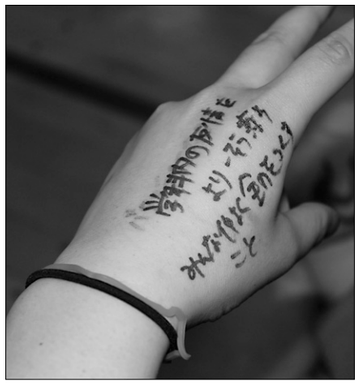
大田原キャンパス運動会
第16回
in OHTAWARA Campus

今年も見事に成功した理学療法学科の人間ピラミッド。

本番1週間前の日曜日。炎天下で練習に励む姿を偶然撮影することができました。連覇の陰に地道な努力あり。これこそが本当の伝統なのかもしれません。

優勝カップを手にするのは井上哲さん（２年）。

今年も看護学科が伝統の「よさこいソーラン」で貫禄の連覇。



相変わらず、普段は軽い扱いの優勝カップ。（ステージ袖にて）

実行委員のメンバー。前列右端が委員長の安藤琢人さん（放射線・情報科学科２年）

●答え：③カンニング（始まる前はかなり緊張していました。でも、立派な選手宣誓でした）

平成二三年度合同入学式

四月六日（水）、福岡リハビリテーション学部・福岡看護学部および大学院の平成二三年度合同入学式が大川キャンパスでとり行われた。

今日から同じ道を歩む仲間です

福岡看護学部としては三回目の入学式である今回は、合同では初めての大川キャンパスでの開催であり、福岡看護学部看護学科一〇三名、福岡リハビリテーション学部一七七名が入学のはこびとなった。式には多数の御来賓や保護者にご出席いただき、新入生の門出を祝福いただいた。

開会に先立って、三月一一日に発生した東日本大震災でお亡くなりになられた方々に黙祷が捧げられた。

開会の辞、校歌斉唱ののち、北島政樹学長、高木邦格理事長からの式辞に続き、御来賓の植木光治大川市長、石川潤一大木町町長、古賀一成衆議院議員、秋田章二福岡県議会議員よりご祝辞を賜った。

お心のこもった祝辞を受け、新入生を代表して福岡リハビリテーション学部言語聴覚学科山辺裕太さんが力強く誓いのことばを述べ、新入生の国際医療福祉大学での新たな日々がはじまったのである。

新入生歓迎会

入学式の混雑が一息ついた四月一五日、二年生の学友会が中心となって一年生の歓迎会が開催された。新しい環境にまだなじんでいない一年生の緊張をほぐし、一年生同士、仲良くなってもらおう、また、学校と上級生である自分たちにも親しんでもらおうと、三月から準備を始めていたものである。

当日は授業の空き時間と昼休みを利用して、講堂にお菓子や飲み物が準備され、「みーんな仲よくなっちゃおう 友達一〇〇人できるかな?!の会」というテーマのもと、一年生はほぼ全員集合しての開催となった。

二年生学友会会長の挨拶ののち、歓談しながらゲームの準備にいそしむ学生達。すでに男女問わず会話がはずんでいるようであった。

その後、豪華（?）賞品付きのビンゴゲームが始まると、あちこちで歓声があがり、会場は大いににぎわいを見せた。

賞品にはこんなものも！

ビンゴゲームが終了すると、今度は二年生有志による「学生生活について」のコーナーとなった。スライドを使いながら、運動会や秋の大学祭、また、日頃の勉強のやり方などが、おもしろおかしく説明され、会場は笑いの渦に包まれた。

会場には東日本大震災への募金箱も設置され、学生たちが次々と募金していった。募金はこの後、日本赤十字社等に寄付されるとのことである。

二年生が自主的にこのような会を催すのは初めてのことであったが、企画・準備から当日の運営、片付けまで、すべて自分たちでやりきった二年生が急に頼もしくなった一日であった。

初めての実習

六月一三日～一七日、一年生にとっての初めての臨地実習である基礎ゼミナールⅡの臨地実習が行われた。

少しでも自分たちにできることを

病院施設での実習は二日間であったが、初めての実習を前に緊張した面持ちであった一年生がなんとも初々しかった。

実習最終日は実習班ごとの発表会が行われ、各班、工夫を凝らした発表がみられた。

発表者は思いのほか落ち着いており、質問に対しても即答で返すなど、初めてとは思えない堂々たる発表ぶりであった。

基礎ゼミナール実習の総括をされる小田学部長

発表者だけでなく、司会進行、タイムキーパーも学生が交替で行い、質問者の指名や、制限時間を越えての発表には遠慮なく注意のベルを鳴らしたりと、こちらも本格的な進行具合であった。

初めての臨地実習は今まで想像の世界であった看護師の仕事を初めて現実のこととして体験するものであったが、その想像と現実との違い―予想以上の重労働、座学で学んだことと現実の現場で行われることが違うこと―等に驚きつつも、たくさんの発見をしたようである。

「実習に行って、ほんとに看護師になりたいと思いました」。こう言った一年生の言葉がとても印象的であった。

いよいよ実習が本格化する三年生、先輩となり学校の中心を担うようになる二年生、そしてフレッシュな一年生、この三学年で、今年度もまた一歩一歩、福岡看護学部は成長を続けていく。

（入試・広報部　藤田祐子）

福岡リハビリテーション学部・福岡看護学部合同入学式開催

桜が満開となった四月六日、福岡リハビリテーション学部講堂にて、「平成二三年度国際医療福祉大学　福岡リハビリテーション学部・福岡看護学部及び大学院合同入学式」が開催された。（福岡リハビリテーション学部一七七名、福岡看護学部一〇三名）

合同では初めての大川キャンパスでの開催

開会に先立ち、東日本大震災で亡くなられた方々、特に帰省先の宮城県岩沼市で亡くなられた大田原キャンパス、医療福祉・マネジメント学科の学生に黙祷を捧げた後、北島政樹学長、高木邦格理事長が式辞を述べた。

続いて植木光治大川市長、石川潤一大木町町長、古賀一成衆議院議員、秋田章二福岡県議会議員よりご祝辞を賜った。

新入生代表で言語聴覚学科の山辺裕太さんが「〝共に生きる社会〟の実現のために、〝心〟ある人間として大きく成長していきたい」と、新入生誓いのことばを述べると、会場内からは祝福と激励の拍手が沸き起こった。

新入生代表の山辺裕太さん

五月晴れの空の下、走る！踊る！頑張る！　三校合同運動会開催！

五月一五日、本学部グラウンドで大川・柳川地区の「三校合同大運動会」が開催された。

今年は絶好の運動会日和。福岡リハビリテーション学部五チーム、柳川リハビリテーション学院二チーム、大川看護福祉専門学校一チーム、総勢約九〇〇名の学生と教職員が集結し、八チーム対抗の大運動会となった。

実行委員三名の選手宣誓で幕を開け、ムカデ競争、台風の目、玉入れと進み、教職員対抗リレーでは教職員が飴食いの粉に顔を真っ白にしながら、借り物競争で奮闘、福岡リハビリテーション学部が一着でゴールした。

昼休み恒例の応援合戦は毎年各校とも趣向を凝らし、本学部も二チームに分かれて見事に息の合ったダンスを披露した。

午後からは、綱引き、今年の新競技の寿司づめと続き、毎年一番の盛り上がりを見せる「チーム対抗リレー」では、福岡リハビリテーション学部（理学療法学科、作業療法学科合同）が見事一着でゴールした。

衣装も華やかな応援合戦

運動会の華、チーム対抗リレー

医療・福祉など楽しい講座開講・本学×大川樟風高校（高大連携事業）

大川樟風高校との高大連携授業が始まり、五月二六日、本学部で開講式があった。今回で五期目となり、大川樟風高校二、三年生の希望者が放課後と夏休みに受講する。本学やグループ校の教員が講師を務め、医療や福祉、科学など七〇分間の授業が年間二五回行われる。

今年度も「医療・福祉の世界」が全体テーマで、二年生の二六名が受講。開講式の翌週には第一回目の授業、後藤純信教授による「脳を知ろう」が行われた。

その他、「看護の歴史と技術」「テストに活かせるかも～記憶の訓練について～」、「赤ちゃんはここがすごい」など、高校生の関心を引くテーマが盛りだくさんに用意されている。

この高大連携事業は、大川市に立地するただ唯一の大学と唯一の高校が連携することで、大学が持つ教育力を活用して「学ぶ楽しさ・知る喜び」を高校生に実体験してもらい、大川の教育、人材育成、地域の発展に貢献することを目的に実施されているものである。

地域の発展をめざし、高校と大学がコラボレーション

「一年生、臨床の現場へ」まなび学・アーリーエクスポージャー（早期臨床体験学習）実施！

六月三日、本学部一年生の必修科目「まなび学」のカリキュラムである「アーリーエクスポージャー（早期臨床体験学習）」が行われた。「まなび学」とは、『大学入門講座と位置づけ、高等学校時代と異なる大学生としての生活の仕方、大学での諸手続きの方法や勉強の仕方、レポートの書き方を初歩から学習し、四年間の大学生活を有意義に実りあるものとして過ごせるような基盤づくりをする。さらに、医療人としての心構え・態度なども学習する（以上、シラバスより抜粋）』という目的で開講されるもので、「アーリーエクスポージャー」はその節目のカリキュラムである。

初めての現場に緊張を隠せない

当日は、高木病院・柳川リハビリテーション病院・福岡山王病院など一〇か所のグループ関連病院・施設に分かれて、朝から夕刻まで終日施設を見学した。

「臨床の現場をじっくりと見させて頂くことは初めてで、緊張しています」（理学療法学科）、「今日は患者の方々との会話やコミュニケーションの取り方などを学ぼうと思います」（作業療法学科）など、それぞれの思いを秘めてこの体験学習に臨んだ。

体験学習を終えた学生からは、思わずほっとした表情も見られた。セラピストへの道はまだ始まったばかり。今日の体験を今後の学習に役立てて欲しい。

（入試・広報部　望月秀樹）

二〇〇九年四月に栃木県厚生連塩谷看護専門学校を承継し、国際医療福祉大学塩谷看護専門学校としてスタートしてから二年が経過した。栃木県内には、看護師を養成する専修学校が一〇校ありますが、中でも栃木県の県北地域には本校一校のみであり、県北在住の学生が数多く在籍している。

国際医療福祉大学塩谷病院と同じ敷地内

当校の校舎は、国際医療福祉大学塩谷病院と同じ敷地内にあり、平成六年に建築された建物ですが、はじめて校舎内に入る誰もが思わず「学校には見えない！」と驚かれる。エントランスホールは吹き抜けで、ガラスの屋根から明るい日ざしが差し込んでいて、壁面も窓ガラスが広がり、那須岳、高原山、遠くは日光の山々などの美しい景色を見渡すことができる。また近くには大型スーパーの入ったショッピングモールやファミリーレストラン、ファーストフード、コンビニエンスストアなどがあり、快適な学生生活を過ごせる環境が整っている。

今年度は新入生四二名を迎え、学生総数は三学年で一一九名となった。

講義は、当校の専任教員だけでなく、塩谷病院、大学病院、大学本校の教職員にご教授いただいている。また、臨地実習も、これまでの塩谷病院、大学病院、なす療育園に加え、今年度からは西那須野訪問看護ステーション、介護老人保健施設マロニエ苑、特別養護老人ホーム栃の実荘、特別養護老人ホームおおたわら風花苑でも実施することとなり、グループ施設で大部分の実習が行えるようになった。グループ施設の温かいご支援にあらためて厚く御礼申し上げます。

六月七日には、新入生の恒例行事である、地域交流を行った。これは、近隣農家の方々のご協力を得て、一グループ五・六人編成で一日農業体験をし、地域の人々とコミュニケーションをとることや、地域社会に関心を持つことを目的としているものである。体験後の発表会で、学生は、「受け身の姿勢ではいけない、積極的にならなければ始まらない」と感想を述べていた。学生にとって実習に入る前の大変貴重な行事であったと思う。

近隣農家で一日農業体験も

（事務部）

本校は、平成二一年度に栃木県厚生連塩谷看護専門学校から国際医療福祉大学塩谷看護専門学校として新しく生まれ変わりました。平成二一年度は看護師基礎教育のカリキュラムが改正する年でしたので、学校が新しく生まれ変わるための準備・カリキュラム改正の準備・学生の教育など、平成二〇年度は教職員一同目まぐるしい日々を過ごしてまいりました。気がつけば早いもので、国際医療福祉大学塩谷看護専門学校になって三年目を迎え新たに新設された統合分野の実習（統合実習）を三年生が実施する年となりました。

統合実習ではより臨床に近い形で実習を行っていきます。今まで学んだ知識・技術を統合し、医療チームの一員として看護師の役割を理解すること、看護のマネジメントできる基礎的能力を養うことを目的としています。実習を通して、看護師が医療チームのなかで、どのように連携して看護を実践しているかを学んでほしいと思っています。

看護師も含めて、我々医療従事者にとって一番重要なことは患者（及び家族）中心の視点で考えていくことです。患者がその人らしく生活していくためには、患者を中心として医師、看護師、コ・メディカルスタッフが連携協働していくことが重要です。ただ、学生を見ていますと、通常の実習では、一人の患者を受け持ち、看護過程をとおして看護を実践する教育を行っているため、医療チームの連携を学んでほしいと実習目標に掲げていても、なかなか学習できる機会が少ないように感じます。しかし、統合実習では、患者を中心に医療チームとの連携のなかで看護を学ぶ機会が得られると思いますし、学習できるよう実習施設とも連携を図ることが教員に求められてくると思います。

医学教育の分野では、チーム医療のための教育を「専門職連携教育」（IPE）として取り組むようになってきており、看護教育の中でも、大学及び医学部にある保健学科や看護学科では取り組みが盛んになってきています。

本校は専門学校で看護学科の単科のためIPEの学習環境をつることは現実困難です。ただ、国際医療福祉大学は様々なコ・メディカルの学科があります。現在、本校と大学のとの接点は講義のみになっていますが、将来的には大学とも連携できるような教育体制を整え、医療チームの一員として看護の専門性が発揮できるような看護師を育成できる教育を行っていきたいと考えております。

私の主張 第19回 チーム医療を担える看護師の育成

塩谷看護専門学校教務主任　砂川かおる

トピックス TOPICS

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社奨学金 奨学生認証式

六月一日、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社本社にて、同社の立山会長、鈴木社長、本学の高木理事長、北島学長らが列席のもと、奨学生認証式が行われた。

この制度は保健・医療・福祉の有為な専門職の育成を目指す本学の趣旨に賛同し、教育を通じた社会貢献活動として、平成九年、同社創立一〇〇周年記念事業の一環として設立された。奨学金は、原則として卒業まで支給され返還の必要はない。

（東京事務所広報室　金井雅之）

8名の奨学生が出席した認証式

奨学生氏名

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社奨学生（平成二三年度新規生）

●保健医療学部
理学療法学科
佐久間達生（2年）
作業療法学科
永井佑佳（2年）
言語聴覚学科
小出知沙子（2年）
視機能療法学科
横田美佳（2年）

●医療福祉学部
医療福祉・マネジメント学科
塩野谷結実（2年）

●薬学部
薬学科
西海弘子（2年）

●小田原保健医療学部
理学療法学科
大内梨央（2年）

●福岡リハビリテーション学部
理学療法学科
梅本翔（2年）

国際医療福祉大学年間成績優秀賞受賞者

●保健医療学部
看護学科
馬場美和（2年）
市村友香莉（3年）
薄井麻希（4年）
理学療法学科
木下琴枝（2年）
大河原咲絵（3年）
西塚佳織（4年）
作業療法学科
大貫わか菜（2年）
山田愛（3年）
松谷ゆかり（4年）
言語聴覚学科
亀井ももこ（2年）
大谷浩之（3年）
坪井美代子（4年）
視機能療法学科
平山真奈美（2年）
福田衣里子（3年）
中村怜美（4年）
放射線・情報科学科
河津恵（2年）
黒川有紀（3年）
伊澤光太郎（4年）

●医療福祉学部
医療福祉・マネジメント学科
黒川祐衣（2年）
宇野静香（3年）
医療経営学科
土屋美幸（4年）
医療福祉学科
早川文香（4年）

●薬学部
薬学科
鈴木真（2年）
手塚千裕（3年）
篠加奈子（4年）
齋藤美咲（5年）
清水香那子（6年）

●小田原保健医療学部
看護学科
田中優大（2年）
杉本夏希（3年）
熊沢歩美（4年）
理学療法学科
島田真衣（2年）
山崎諒介（3年）
田上真奈巳（4年）
作業療法学科
鈴木美咲（2年）
小瀬良潤（3年）
高木沙己（4年）

●福岡看護学部
看護学科
吉村小夜子（2年）
福田美幸（3年）

●福岡リハビリテーション学部
理学療法学科
田中綾（2年）
中元唯（3年）
末廣優介（4年）
作業療法学科
坂井和美（2年）
中元華穂（3年）
林怜美（4年）
言語聴覚学科
田口智子（2年）
友池理歌（3年）
山本矩実（4年）

（大田原キャンパス　学生課）

視機能療法学科 新入生歓迎会・学科交流会

四月二九日～三〇日の二日間、視機能療法学科新入生歓迎会・学科交流会が、那須セミナーハウスで行われた。

新入生五一名は、到着後すぐに「力試しクイズ」でサプライズ歓迎。クイズの後は、緑豊かな自然の中でバーベキューを楽しんだ。時々小雨の降る生憎の天気であったが、そんな天気をものともせず、盛大に肉や野菜を焼き、お腹いっぱい食べ、先輩たちや教職員と大いに語り、学科の親睦を深めることができた。

翌日はバドミントンやドッジボール等のスポーツを通して、さらにお互いの距離を縮めることができ、実り豊かな会となった。

（視機能療法学科助手　古川珠紀）

薬学部　白衣授与式

四月二八日、大田原キャンパスで初の「薬学部白衣授与式」が行われた。

実習の受け入れ先であり来賓の蘇原泰則病院長、江口光興病院長や教員、四年生の参加のもと、長期実習に入る五年生一三〇人に、大学ロゴ入りの真新しい白衣が贈られた。学生代表の石川雅人さんと津田悦子さんは、白衣に手を通したばかりの緊張した面持ちで宣誓を読み上げ、五月から始まる実習に臨む決意と誇りを語った。

続く挨拶の中で、北島政樹学長は、自身の経験から白衣を身につけることにより醸成される集団への帰属意識について述べ、さらに、この式を準備した教員や先輩の努力と、そこにある学生に対する期待を説いた。

白衣を身につけ宣言する津田悦子さんと石川雅人さん

（東京事務所広報室　金井雅之）

チョーライ病院との協定締結

六月三日～七日、高木邦格理事長はベトナムを公式訪問し、六日にはホーチミン最大のチョーライ病院（Cho Ray Hospital: CRH）を訪れ、本学との医療・学究的分野における協定書を締結した。CRHは一九〇〇年に設立された保健省直轄の南ベトナム最大の基幹病院で、本学も毎年多くの学生が「海外保健福祉事情」でお世話になっている。CRHにはホーチミン市のみならず南ベトナム中から患者が集まり、一日当たり外来が約三〇〇〇人、救急が約二八〇人、一七〇〇ベッドに対し入院患者が二五〇〇人を上回るなど、まさに南ベトナムの医療を支えている病院である。六日の夜には南ベトナム病院会会長も務めるSon院長を中心に病院関係者を一四名招待した本学主催の公式晩餐会を開催、七日にはCRH主催の晩餐会が開催され、今後より一層医療・学研的分野を中心に交流を深めていくことで一致した。また、現在本学が採択された経産省の「遠隔病理診断・画像診断システムをアジアで展開する調査事業」についても協力して進めていくことになった。

（東京事務所　秘書室）

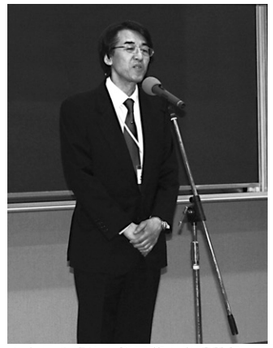
視察に訪れたチョーライ病院にて

協定書の締結を終えて固い握手

「日本哺乳動物卵子学会」開催

「第五二回日本哺乳動物卵子学会総会・学術講演会」は、同学会の副理事長である柳田薫大学院教授（国際医療福祉大学病院リプロダクションセンター長）が大会長を務め、五月二一日～二二日、本学大田原キャンパスで開催された。

初日の冒頭、柳田薫大会長の開会の辞で幕が開き「卵子と精子のインターアクション」という大会テーマのもと、受精、胚発生、着床、ES細胞や臨床での体外受精関連の研究発表などが行われた。


大会長を務めた柳田薫大学院教授

初日のランチョンセミナーは堤治大学院教授（山王病院院長）が座長を務めたほか、二日目には藤原敏博山王病院リプロダクションセンター長が登壇するなど、本学からも不妊治療の第一人者が多数出席した。

さらに、初日午後からのシンポジウムの冒頭、北島政樹学長が今回の大会が多くの成果を生み出し、学会がますます発展することを祈念して挨拶に立った。

柳田学会長は最後に、「この大学のことを知ってもらいたい、いつもと違うところで開催したいという思いで、大田原での開催を企画した。非常に多くの人に集まっていただき、学会としては大成功」と締めくくった。

挨拶する北島政樹学長と柳田大会長

中央臨床研修委員会「研修医合同オリエンテーション」開催

毎年四月に、当グループに入職したての初期研修医に対して「合同オリエンテーション」を開催している。ご存じのように、本年は震災の影響もあり、六月一六日からの三日間に順延して、開催した。

全二一名の研修医が、東京、栃木、熱海の地で研修をした。理事長、学長、大学院長をはじめ多数の方々から、将来の医療を担う医師たちへエールを込めた講義をして頂いた。懇親会の席では、なかなかご一緒できないような諸先輩の謦咳に接することができ、研修医諸君も貴重な経験をすることができたと思う。

例年と異なり、二ヶ月程臨床現場での経験を積んだ上での参加だったので、ちょっとした会話の中にも、医師としての自覚を垣間見ることが出来、とても頼もしく感じた。ハートを持ったすばらしい医師に育つことを信じてやみません。

最後に、オリエンテーション開催にご協力頂いた全ての皆様方に、この場をお借りして、心から御礼を申し上げます。

（医学教育研修センター長　天野隆弘）

大田原キャンパスにて

山本澄子教授が文部科学大臣表彰の科学技術賞（開発部門）を受賞

文部科学省では、科学技術に関する研究開発、理解増進等における顕著な成果に対して、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的として科学技術分野の文部科学大臣表彰を定めている。このたび、本学大学院の山本澄子教授が中心となって開発した〝脳卒中片麻痺者のための装具〟が平成二三年度の科学技術賞（開発部門）を受賞した。

「これは『ゲイト・ソリューション』と命名した装具です。ゲイトは歩行、ソリューションは解決という意味なので、歩行の問題を解決する装具という意味をこめました。従来の装具は安定性を重視して、足首の動きを制限するものが多く、歩きやすさについてはあまり考慮されていませんでした。私たちは二〇年以上前から、特殊なカメラなどを使用して片麻痺の方の歩行計測を行い、装具に必要な機能について検討してきました。ゲイト・ソリューションは装具の足首部分に組み込んだ油圧ダンパーによって、足首を動かしながら動きを補助する機能を実現したものです。

開発は、機械部品を設計製作したエンジニア、使用する方の足にフィットするように装具全体の形状を検討した義肢装具士、片麻痺者の歩行練習の立場から装具に必要な機能を考えた理学療法士、片手での着脱がしやすいようにベルトなどの形状を検討した作業療法士、使ってみたいと思われるデザインを目指したデザイナーなど、多くの方々の力を集めて行われました。その結果、現在では全国で一万人以上の方に使っていただけるようになりました。

このたび、北島学長のご推薦をいただき、このように名誉ある賞をいただけたことはたいへん光栄です。これからは国内だけでなく、海外での普及も目指していきたいと考えています」

（山本先生談）

例年四月中旬に開催されていた表彰式は東日本大震災の影響で中止になったが、四月下旬に賞状と副賞が送付された。

（広報室　金井雅之）

山本先生の他、共同開発者の４名が表彰された

賞状を手にする山本先生

平成二二年度学校法人国際医療福祉大学決算報告

平成二二年度は、薬学部及び福岡の各学部における学年進行により、学納金収入が前年より五億円以上増加、また、四附属病院もそれぞれ順調に収益を伸ばし、医業収入は前年より約二〇億円の増収となった。

学校法人全体での償却前経常利益は、運営費補助金一〇億円の交付を受けた昨年とほぼ同額の約三六億円を確保している。

自己資本五七〇億円、基本金は六七一億円に達し、平成二三年度中には、三田の新病院が竣工となるため、施設・設備の一層の拡充が進むものと見込まれる。

なお、東日本大震災による被害を受けた施設の修繕費支出に備え、平成二二年度決算において、災害修繕損失引当金を二億円繰り入れることとした。

（経理部長　岸儀子）

消費収支計算書

本年度（自　平成22年4月1日　至　平成23年3月31日）
前年度（自　平成21年4月1日　至　平成22年3月31日）

学校法人国際医療福祉大学　（単位：千円）

科目＼摘要	本年度	前年度	増減
消費収入の部			
学生生徒等納付金	8,701,370	8,135,090	566,280
手数料	230,555	200,701	29,854
寄付金	257,043	20,041,855	△ 19,784,812
事業収入	315,864	262,447	53,417
医療収入	27,992,281	25,970,111	2,022,170
資産運用収入	92,013	92,727	△ 714
補助金	1,365,910	2,564,770	△ 1,198,860
雑収入	291,365	231,785	59,580
資産売却収入	0	861	△ 861
帰属収入合計	39,246,402	57,500,347	△ 18,253,945
基本金組入額	△ 2,449,034	△ 22,027,590	19,578,556
消費収入合計	36,797,368	35,472,757	1,324,611
消費支出の部			
人件費	16,262,529	15,025,388	1,237,141
教育研究経費	2,729,112	2,686,058	43,054
医療経費	11,434,464	10,854,420	580,044
管理経費	6,903,559	6,746,591	156,968
借入金等利息	179,245	136,302	42,943
資産処分差額	144	308,199	△ 308,055
徴収不能引当金繰入	27,437	12,347	15,090
消費支出合計	37,536,491	35,769,305	1,767,186
消費収支差額	△ 739,123	△ 296,548	△ 442,575

※前年度寄附金は、土地評価益194億円を含む。

貸借対照表

平成 23年 3月 31日　（単位：千円）

科目	本年度末	前年度末	増減
資産の部			
固定資産	65,435,886	65,979,021	△ 543,135
有形固定資産	64,817,826	65,416,107	△ 598,281
土地	32,612,437	32,580,732	31,705
建物	22,809,854	23,633,176	△ 823,322
構築物	1,161,078	1,223,722	△ 62,644
教育研究用機器備品	3,802,155	4,023,321	△ 221,166
その他の機器備品	2,041,816	1,620,907	420,909
図書	732,724	687,253	45,471
車輌	70,587	69,821	766
建設仮勘定	1,587,175	1,577,175	10,000
その他の固定資産	618,060	562,914	55,146
ソフトウェア	34,750	26,249	8,501
借地権	2,190	2,190	0
電話加入権	4,717	4,717	0
有価証券	248,855	194,055	54,800
長期貸付金	169,704	178,558	△ 8,854
差入保証金	147,844	147,145	699
長期預け金	10,000	10,000	0
流動資産	18,486,533	15,902,670	2,583,863
資産の部合計	83,922,419	81,881,691	2,040,728
負債の部			
固定負債	15,974,260	16,677,766	△ 703,506
流動負債	10,899,788	9,865,466	1,034,322
負債の部　合計	26,874,048	26,543,232	330,816
基本金の部			
基本金の部　合計	67,088,861	64,639,827	2,449,034
消費収支差額の部			
翌年度繰越消費支出超過額	10,040,490	9,301,368	739,122
消費収支差額の部　合計	△ 10,040,490	△ 9,301,368	△ 739,122
負債の部、基本金の部および消費収支差額の部　合計	83,922,419	81,881,691	2,040,728

■附属病院

国際医療福祉大学病院

救院内助産「ばーすはうす　ママ♡はーと」

平成二〇年に全国で三一カ所だった院内助産も二二年には五九カ所と年々増え続けている。その中でも当院のような恵まれた環境で始められるケースは少ないのではないか。なぜなら、快適性を追求した設備とケア、周産期センターの傘下である安全性、そして、他にはない大学院助産学分野との協働による専門性の追求・確立が可能だからである。

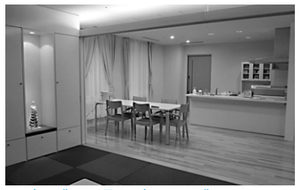
会議には、周産期センター長、NICU医師、看護部責任者、院内助産スタッフと大学院助産学分野の教職員が参加し、方針、計画、内容、評価を兼ねた意見交換を通じて連絡調整を行っている。目指すのは日本初、院内助産院におけるユニフィケーションである。アメリカのような大学と病院の完璧なユニフィケーションではなく、臨床と教育が互いの役割を調節し、互いに啓発していくことをコンセプトとする当院の個性に合ったユニフィケーションモデルを構築していきたい。将来的には地域との連携強化、研究開発事業も視野に置きたい。

現在、スタッフは五人の助産師で構成している。助産学の修士課程修了者、修了見込みの大学院在籍者と、厳しい院内基準をクリアしたベテランである。本院独自のガイドラインに基づき、安全で快適なお産を目指し、日々助産ケアの質の向上、個々の資質の向上に励んでいる。時代と共に助産教育や助産師の働き方が変化している現状を受け止める一方、変わらない部分も大切にしたいと思う。

まだ、始まったばかりだが、私たちのモチベーションが上がる瞬間は、やはり「満足のいくお産」のお手伝いができた時である。六月一五日にばーすはうす第一号、一八日に第二号の出産があった。いずれも陣痛開始から分娩終了までゆっくりと時間が流れ、私たちは一時もそばを離れず、お母さんの気持ちに寄り添い、お母さんが楽だと思う体位での分娩（お二人とも四つん這いの出産だった）をお手伝いした。赤ちゃんの回旋を感じながら出産できたと言うお母さんの言葉通り、自然の流れに逆らわない分娩だった。

退院されるときに、「大満足です。またここで産みたい」と言われ、立ち合ったおばあちゃんから「ここは安心して娘のお産を任せられる」と言われたことは助産師冥利に尽きる。お産は百人百通りの形があり、何年助産師をやっていても、無事赤ちゃんの産声を聞くまでは生きた心地がしないもの。安全の確保が必須条件であることを忘れずに、これからも「満足のいくお産」のお手伝いができるよう努力と研鑽を重ねたいと思っている。

（ばーすはうす　間中伴子）


リビングから見たダイニング

■附属病院

国際医療福祉大学塩谷病院

平成二三年三月一一日に東日本大震災が発生しました。当地区においても震度五強という、経験をしたことのない強い揺れに不安を感じたが、幸いにも建物本体に大きな被害はなく、当院の患者様に影響はなかった。

しかし、マロニエ苑、栃の実荘の入所者様は国福病院および近隣の学校に緊急避難しなければならない状況となってしまったため、当院ではマロニエ苑より百名、栃の実荘より五二名の入所者様を当院病棟で受入れることとなった。

移動などでは学生ボランティアが活躍

受入れに際して、当院では、開棟していない二階西病棟、三階東病棟、四階西病棟の三病棟を受入れ病棟として設定。特に承継後、一度も開いていない二階西病棟と四階西病棟については、資材の整理からはじまり、清掃、ベッド搬入と当院の職員も急ピッチで受入れに向け作業を行った。さらに患者受入れ・対応については山王病院、三田病院、熱海病院、九州地区の施設から医師、看護師の応援をいただき、さらにはたくさんのボランティアの皆様の協力もあり、地震発生後から一週間で計画の一五二名を受け入れることができた。応援いただいた皆様、本当に感謝しております。ただ、慣れない病棟での生活に入所者様は相当戸惑っている様子だった。全く見たこともない施設で院内を歩き回る方や環境の変化で体調を壊される方、また職員も同様で不慣れな状況での勤務で互いに試行錯誤の毎日だった。

一か月が経過し、施設も落ち着きをみせてきた。入所者の方もだいぶ環境に慣れ、塩谷病院に馴染んでおり、何だか三百床開棟している活気のある病院と錯覚してしまうようだった。

マロニエ苑の改修工事も進み、六月五日（日）、マロニエ苑に帰院される入所者様を送り出す日がやってきた。午前・午後二班に分け、特に大学ボランティアの方たちが入所者の方の移動や荷物の持ち出しに大きく貢献していただき、遺漏なく無事合計八五名の入所者様を送り出しひと安心。中には「もうすこし塩谷病院で過ごしたかった」、「マロニエ苑に帰れるのはうれしいが、塩谷病院も名残惜しい」とおっしゃる入所者様もおり、胸が熱くなりました。この震災を通じてのグループ施設が一つになったと感じたひと時だった。

（事務局）

帰院される入所者様を見送るスタッフ

■附属病院

国際医療福祉大学三田病院

緩和ケア研修会を開催

去る五月二一日（土）、二二日（日）の二日間にわたり、厚生労働省の「緩和ケア研修会開催指針」に基づき、がんに携わる医師、看護師等を対象とした緩和ケア研修会を開催した。医師一五名、看護師一名、薬剤師一名、医療従事者一名が参加し、緩和ケアの知識、技能、態度を講義やロールプレイを通して習得した。参加者はすべての単位を取得し、厚生労働省健康局長より修了証の交付を受けた。

リハビリテーション室のご紹介

リハビリテーション室は今年四月、理学療法士三名、作業療法士一名、言語聴覚士二名が新たに入職し、現在は理学療法士九名、作業療法士四名、言語聴覚士五名が在籍している。当院は、頭頸部腫瘍センター、耳鼻咽喉科などに専門的なリハビリテーションを必要とする疾患を有する患者数が多く、言語聴覚士によるサポートがチーム医療の大きな役割を担っている。

今年四月、国際医療福祉大学を卒業し言語聴覚士として三田病院に勤務を始めた渡部恵子さんに四月からの研修についてお話を聞いた。

「これまでに嚥下訓練や発声・発語に障害のある患者様を担当し、スーパーバイザーとなる先輩にアドバイスを頂きながら臨床を行っています。疾患だけでなく患者様やご家族の今後の生活を考えながらリハビリを行うことに、言語聴覚士としてのやりがいと責任を感じています。先輩職員や患者様からいただく温かい言葉に支えられながら、今後もさらに知識と経験を積んでいき、より良い医療を提供できるよう努力していきたいと思っています」

およそ六カ月をかけて全般的な疾患への対応を経験した後、三田病院の医療を担う一人として活躍を期待している。

（総務企画課　小倉由紀子）

患者様の発声訓練を行う渡部職員

■附属病院

国際医療福祉大学熱海病院

【第五〇回熱海病院院内学術懇話会】

当院では院内学術懇話会を定期的に開催し、各部署間の情報交換や各職員の知識と意欲の向上に役立てている。

五月二七日（金）、第五〇回目の院内学術懇話会が開催された。五〇回という節目を迎え、内容も講演のみの特別構成で実施された。本校薬学部の実習生を含む約一四〇名の参加により、活発な意見交換が行なわれた。

【記念講演】

一．神経内科の過去・現在・未来
（司会：大津聡美　ICU師長）
永山正雄（神経内科教授）

二．日本の肺がんと世界の肺がん
（司会：太田祥恵　看護部師長）
興石義彦（呼吸器外科教授）

三．機能温存を目指した胃癌のオーダーメイド医療
（司会：猪野智佳　五・六階病棟師長）
竹下公矢（内視鏡教授）

四．移植医療の現状と今後の展望
（司会：横山直司　看護副部長）
寺岡慧（院長・移植外科教授）

【第一三回褥瘡講演会】

六月一四日（火）、当院地下一階の大会議室において、第一三回褥瘡講演会が開催された。

今回は、平塚共済病院皮膚科部長、福永有希先生をお招きした。無菌状態で飼育されたハエの幼虫（マゴット）を用いて、褥瘡により壊死した組織の治療を行なう、マゴット治療の実際について、わかりやすく解説していただいた。約五〇名の職員が参加し、古くから用いられていながら、普段あまり触れる機会のない治療法について、興味深く耳を傾けた。

【演題】褥瘡のマゴット治療
【講師】平塚共済病院　皮膚科部長
福永有希　先生

（総務課　篠原拓真）

臨床医学研究センター（東京地区）

医療法人財団順和会 山王病院・山王メディカルセンター

東日本大震災と山王病院

平成一二年に現在の地に移転新築した山王病院は、大規模な地震にも耐えうる免震構造を採用している。これは、地面に設置したいくつかの巨大なゴム輪の上に建物を乗せる工法で、震度七の地震でも体感は震度二程度、という画期的なもの。三月一一日、すぐ近くにある東京事務所では壁や天井が剥がれ落ちるほどの強い揺れがあり、東京事務所職員は山王病院内にある山王ホールに避難した。この日、都内の交通機関は全線、運休を余儀なくされ、一部運転が再開したのは深夜になってからだった。山王病院では帰宅難民になった患者様に一階エントランスホールを解放し、職員は手作りのおにぎりと味噌汁を配るなどしてともにその夜を過ごした。携帯電話などが不通となる中、患者様は、ホールに急きょ設置された大型テレビに熱心に見入っていた。国際的な病院として知られる当院には外国籍の患者様も多く、交通情報やニュース速報を職員が英語でアナウンスする一幕も。

また、震災直後から内科の医師や医療スタッフを栃木地区に急派。東京地区に比べ甚大な被害を受けた国際医療福祉大学病院、マロニエ苑などの復旧に全面的な支援を行った。

四月に血管病センター開設

山王メディカルセンターは四月、わが国で急増している大動脈瘤や閉塞性動脈硬化症、下肢動脈瘤などの血管疾患を対象に集学的な治療を行う「血管病センター」を開設した。センター長には日本血管外科学会や日本脈管学会の理事長で、東京医科大学外科第二講座主任教授を務められていた重松宏先生をお迎えした。当センターは、血管外科医四名による充実した布陣。山王メディカルセンター内にある人工透析センターや、国際医療福祉大学三田病院の心臓血管センターとも連携し、血管内治療やバイパス手術などを積極的に行っている。

重松宏先生

さんのう健康講座「ここまでわかる！脳ドック」開催

山王病院では六月二九日、さんのう健康講座「ここまでわかる！脳ドック」を開催した。講師は山王メディカルセンター院長で、脳卒中や認知症、パーキンソン病などの神経内科のエキスパートである天野隆弘先生。七十名ほどの参加者で、山王ホールは満員になった。「認知症の脳はどんな脳？」「3・0テスラMRIで見る脳の世界」などの話は興味深く、活発な質疑応答のうちに閉会した。

（東京事務所広報室・坂田洋子）

天野隆弘院長

臨床医学研究センター（千葉地区）

化学療法研究所附属病院

外部に向けて・看護部活動報告

本来の看護業務は患者と寄り添いケアを行うことが最も大切ですが、そのケアの本質を見極めさらに発展させるために、外部での活動に積極的に参加することも原点を見つめるよい機会となっています。

【手術室より学会に参加して】

先般、千葉で開催された内視鏡外科学研究会は医師、看護師、業者部門で構成された研究発表会で、看護部として「内視鏡外科手術への確立と実践」という演題で臨みました。

演者は国際医療福祉大学を卒業した手術室一年目だった稲川夕花看護師。病院の概要と当院内視鏡外科手術への取り組みと成果、コストパフォーマンスの改善と向上を主とした構成で、スライドと動画を取り入れ具体的で分かりやすい発表となるよう工夫しました。日々の業務の中での時間配分や長期的なコスト削減など多方面にわたり効率よく手術室を運営している実例を熱心に聴いている姿が印象的でした。コメンテーターの千葉大学・林秀樹先生からも一年目ながら堂々とした発表で内容も素晴らしいとのコメントをいただきました。

特にこの看護部門のセッションは、質疑応答が活発に行われ、有意義なディスカッションの場となりました。また同期の白石晴子看護師が積極的に質問し、化研病院の一年目看護師の活躍が目を引いていました。

このセッションの座長として非常に有意義な時間を会場の皆様と共有でき、大役を果たせた安堵感でいっぱいです。

さらに今回は特別講演として国際医療福祉大学北島政樹学長のがん臨床における最前線の治療について言及され、医師・看護師ら多くの参加者が熱心に耳を傾けていました。

学会参加全般を通し、得るものが非常に多くありました。この経験をステップにし、医師とのチームワークをより強固にし、安全で効率的な内視鏡外科手術介助を目指し、更なる理想的な手術室の構築に務めたいと思います。

（手術室師長　五井こずえ）

わかりやすい発表で評価の高かった稲川夕花看護婦

【専門領域で学術集会に挑む】

療養病棟を有する化研病院ならではの「老年看護」領域で、日本看護学会学術集会の演題に採用されました。

発表内容は高齢者の特徴に焦点をおいたテーマとして布オムツと紙おむつを比較検証した「看護業務効率化にむけた排泄ケア用品交換の試み」。

七月二六日にさいたま市で開催された第四二回日本看護学会で発表し、好評のうちに終わりました。

（療養病棟師長　下山潤子）

臨床医学研究センター（九州地区）

高木病院

認知症についての講演会

第五回大川市「未病と健康のつどい」が六月五日、同市文化センターで開かれ、約九〇〇人の市民が参加した。福岡県大川市と日本未病システム学会主催で、同学会常任理事の山本匡介・高木病院院長が開催責任者を務めている。今回のテーマは、過去の参加者アンケートで最も要望が強かったことから「認知症は防げる～診断と治療～」になった。

座長役の山本院長の進行で、まず田中薫・高木病院神経内科部長が「認知症ともの忘れ外来」について分かりやすく解説。続いて原英夫・佐賀大学医学部神経内科診療教授が「アルツハイマー病治療の最新情報」、武田雅俊・大阪大学大学院医学系研究科教授が「認知症の予防と対応」をテーマにそれぞれ講演した。

だれもが関心を持つ認知症についての講演だけに、参加者は熱心に耳を傾け、老化と認知症の違いや早期発見のポイント、新しい治療薬、予防法などをメモしていた。休憩時間には、高木病院の女性医師二人によるピアノとフルートのアンサンブル演奏もあり、参加者を魅了した。

（広報室　関屋真由美）

座長を務めた高木病院の山本院長

福岡山王病院

江本精・予防医学センター婦人科検診部長が社団法人日本超音波医学会の第一〇回松尾賞を受賞した。

松尾賞は、同学会が毎年公募しているもので、臨床現場での超音波による検査や治療に関して優れた研究業績を上げ、学会の発展に尽力していると認められる方に授与される権威ある賞とされている。

主な研究テーマは、低出力超音波とある薬剤を併用することにより、がんの治療に相乗効果があるというものである。身体に安全な超音波を診断だけでなく、がん治療に使用するという独創的な点が評価された。より安全な治療を目指すために、超音波を治療に応用するという意義は大きいといえる。

江本医師は同学会認定専門医で、国際医療福祉大学教授である。

「予防医学センターでは、超音波診断を含めたハイレベルな婦人科検診が提供できるよう努めたい。同時に、検査技師に超音波検査の指導も行いたい」と意気込みを語った。

（広報室　山田　久美）

受賞の喜びを語る江本医師

介護老人保健施設マロニエ苑

復旧工事完了

「入所者の皆さん、お帰りなさい」

三月一一日の東日本大震災でマロニエ苑は建物の亀裂や漏水等による被害を受け、入所者の皆様には、国際医療福祉大学病院と国際医療福祉大学塩谷病院に分かれて避難をしていただいた。建物の躯体には問題ないため復旧工事に着手し、五月末に完了した。

この間、大変ご迷惑をおかけしましたが、六月四日、五日の両日、入所者の皆様が首を長くして待っていたマロニエ苑への復帰が、一人の事故もなく無事に終了した。

「マロニエ苑に戻り、窓から見える緑とそよ風を感じ本当に安心しました」

「食事の場所等が狭かったが、今度は広い場所で皆さんと団らんをしながら食事が出来るのは大変嬉しいことです」

などの感想が聞かれ、皆さん大変喜んでくださいました。

入所者を拍手で出迎え

マロニエ苑の復興に対しまして、学校法人、グループ関係者や学生ボランティアの皆様には、被災当初より長期間にわたり応援をいただきありがとうございました。特に学生ボランティアの皆様には介護のお手伝いのみならず、ベッド移送などの力仕事をしていただいたことで入所者の皆様から大変喜ばれておりました。これからも行事等の時に応援をいただけたら幸いです。

六月六日からは通常の状態に戻りましたが、新規入所、短期入所の受入れについては六月一三日から再開しました。また同時に通所介護も再開しましたので、これでマロニエ苑・にしなすの総合在宅ケアセンターの全ての事業が再開し、震災前の業務体制に戻りました。皆様のご支援に対しまして深く感謝申し上げます。これからは、今まで以上に職員一同より質の高い介護サービスの提供に向けて努力してまいります。ありがとうございました。

（事務部長　細小路岳史）

震災関連ニュース
special feature article

高木病院の医師、看護師が茨城県高萩市と福島県いわき市へ

東北関東大震災大川市復興支援本部と大川三潴医師会が被災地へ派遣する医療チームが三月二三日、大川市を出発した。二七日までの五日間、茨城県高萩市と福島県いわき市で健康調査や診療活動にあたった。

高木病院からは、循環器センターの吉廣剛先生、外科の山本一博先生、呼吸器センターの星野鉄兵先生、看護師の西真貴子さん、山口琴路さんが医療チームに加わった。出発式で吉廣剛先生が「短い期間ですが、頑張ってきます」と決意を述べ、見送る市や高木病院職員らの拍手に送られ出発した。

出発する大川市の医療チームメンバー

現地での活動の様子

三月二八日に大川市役所で行われた、植木市長らへの支援活動報告では、茨城、福島両県で震災による孤立集落や避難所の健康調査・訪問診療を行ったことなどを伝え、「被災地の現場経験を今後に生かしたい」と述べた。

さらに、三月三一日に行われた大川三潴医師会定時総会での活動報告では、いわき市は地震と津波の被害に加え、市域の一部は福島第一原発から半径三〇キロ圏内の屋内退避区域にかかっていて、放射線測定器を携えての活動になったことや、持参した湿布・抗生剤等が現地では不足していたため重宝されたことなどを伝えた。

活動報告の様子

化研病院の医療救護班が岩手県陸前高田市へ

本学の臨床医学研究センターである、千葉県市川市の化学療法研究所附属病院（化研病院）では、東日本大震災の被災地支援の一環として、千葉県からの救護班要請を受け、岩手県陸前高田市へ医療救護班を派遣した。

○派遣期間
四月二四日（日）～二八日（木）

○派遣メンバー
小中千守 研究所長・副院長、福田元 内科副部長、五井看護師長、皆川看護師、国福病院薬剤師・平野係長、栃木本校薬学部・廣澤先生、樽見医事課主任、高橋総務人事課職員

・四月二四日
前泊地、岩手県一関市に到着。前チームの千葉県リハビリテーションセンター病院チームから引き継ぎを受ける。

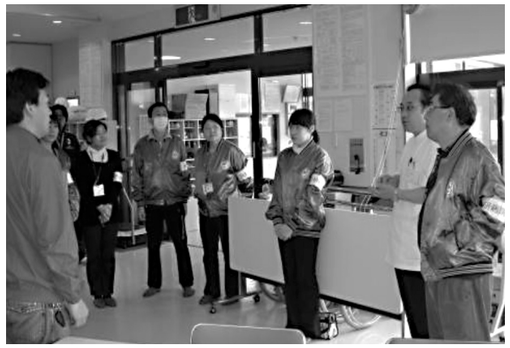
・四月二五日
陸前高田市の仮診療所である東部デイサービスセンターにて、計六七名を診療。地元保健師の依頼で、避難所への往診に同行。東部デイサービスセンターほか六か所からなる仮診療所の本部拠点である米崎コミュニティセンターにて、他チームと合同ミーティング。（以降毎日実施）

医療チームの宿泊拠点

・四月二六日
千葉県木村病院から派遣された「こころのケアチーム」と合流。連携しながら計七〇名を診療。

・四月二七日
計五九名を診療。

・四月二八日
次の派遣チームである東京女子医科大学八千代医療センター（千葉県八千代市）チームに業務引き継ぎを行い、医療救護活動を終了。


現地でのミーティングの様子

高木邦格理事長が被災地を視察

四月二〇日～二一日、高木邦格理事長は公益社団法人全国老人保健施設協会（以下、全老健：施設数約三四〇〇、入所者数約三一万人）の震災担当副会長として、福島県および岩手県の被災した老健施設を中心に視察し、支援物資を届けた。全老健の本間支部長（福島県）、木川田支部長（岩手県）と面談し、老健施設の被災状況や他県からの介護職員の受け入れ状況、支援物資の充足度などをヒアリングし、必要な人的・物的支援について調査を行った他、福島県庁、栃木県庁を訪れ、担当者と震災被災者および原発避難者の受け入れ態勢などについて協議を行った。

福島県の本間支部長との協議

岩手県陸前高田市

介護老人保健施設での復興支援活動

国際医療福祉大学保健医療学部 看護学科
谷規久子・荒川邦子

今回、私たちと特別養護老人ホーム新宿けやき園の職員の四名は、二班（一班 六月五日～一二日、二班六月一二日～一五日）に分れて介護老人福祉施設「松原苑」の復興支援活動に参加した。松原苑は、市内の高台にある入所者一九〇名、デイケア五四名、職員は二二六名の施設だった。

被災直後は、近隣の施設等に入所者全員が退避し五月には全員が戻ったが、在宅や避難所にいる要介護高齢者の受入れに伴い新規入所者が増え、オーバーベッドの状況にあった。

私たちは、療養棟の各階に分かれて、看護部長・看護課長の指示のもと業務を行った。認知症専門病棟では、コミュニケーションや行動の観察を行った。療養棟では、退避先で発生した褥瘡の回診や処置、皮膚の変化に伴う軟膏等の塗布、関節痛・筋肉痛に伴う湿布の貼用、胃瘻挿入部の皮膚ケア、口腔ケア、口腔・鼻腔吸引、食事介助、経管栄養、排泄ケア、入浴介助、コミュニケーション、環境調整等、普段の業務を看護職や介護職とともに行った。少しでも職員の業務の軽減を図ることができればと思い、今までの自分の経験を生かして柔軟な対応を心がけた。皆さんのお役に立てたかは分かりませんが、皆さんと一緒に過ごすことができたことを誇りに思っています。

震災後三カ月が過ぎ、職員の皆さんのこころとからだの疲労はピークに達していると思いますが、その団結力には頭が下がった。

今回の機会を与えて頂きました高木邦格理事長に感謝いたします。

沼田ゆきえさん告別式

東日本大震災で本学在学生として唯一お亡くなりになられた沼田ゆきえさん（医療福祉・マネジメント学科二年＝当時）の告別式が五月五日一三時より、宮城県名取市のセレモニーホール掬水苑で執り行われた。

本学からは、北島政樹学長、丸木一成学部長、絹木憲司准教授のほか、教員六名、学生三八名がチャーターバスなどにより会場に駆けつけた。

喪主である父親の民雄さんは、奥様やゆきえさんを含めご家族五人とご親戚一人を一度に亡くされ、六人の遺影が並ぶ式場は、今回の震災が一瞬の悪夢だったことを改めて印象づけた。

ゆきえさんを直接指導した絹木准教授は弔辞の中で、ゆきえさんは大学でいつも笑顔だったこと、さらに、変わり果てた姿で見つかった時もいつも通りの笑顔をたたえていたことを紹介し、その笑顔で仲間をずっと見守ってほしい、そして、二年後にはいっしょに卒業しようと呼びかけた。

お父様に手作りアルバムを贈る学生たち

最後に挨拶に立った遺族のひとり、女子高校生のことばが印象的だった。

「私たちは今回の震災で、命の大切さともろさを同時に知りました」

命のもろさ。高校生に語らせるにはむご過ぎると感じるとともに、被災者の方々は誰もがこうした心の体験をしているのだと深く胸に刻む一言だった。

（広報室 金井雅之）

義援金のお知らせ

東日本大震災を受け、本学提携機関である中国リハビリテーション研究センターと仁済大学校から義援金が寄せられました。改めて感謝申し上げます。

▼中国リハビリテーション研究センター
卒業生を含む本学留学生一九名、その他四名の学生有志の方から、九二〇〇元（一一万三千円）。

▼韓国・仁済（インジェ）大学校
ヤン先生と日本ファンの学生有志から。

謝恩会開催費用を義援金として寄付

このたびの大震災により、大田原キャンパスでは学位記授与式及び謝恩会を中止した。会費の返金にあたり、「被災者のために役立ててほしい」との声が多く、謝恩会実行委員長名で呼びかけた結果、卒業生一同として二二七万四六七円を寄付いただいた。厚くお礼申し上げます。

▼下野新聞「東日本救援募金」へ
下野新聞を通じて被災地域の方々へ
一二七万四六七円

▼国際医療福祉大学学生への義援金
本学に在籍し被災した学生へ
一〇〇万円

卒業生・留学生 通信 feature article

留学生紹介コーナー

国際学生学術論文発表会レポート

医療福祉学科四年　常盤正浩

三月一五日、元培科技大学（台湾）で国際学生学術論文発表会が開かれました。参加国は、中国、ドイツ、日本、韓国、台湾の五ヶ国です。総勢六二名の学生が専門分野（情報工学、生物工学、看護、医療保健、管理運営）において研究成果を発表しました。

私は、「高齢者虐待」について報告しました。最近の調査結果をもとに年々増加していることや家族が危機的状況であることを伝えました。海外でも高齢化は深刻であり、真剣に聞く学生の姿がありました。台湾では、高齢者を労り大事にしています。子どもは、お年寄りを慕い仲良く暮らしています。お年寄りと若者が手を繋ぐ姿や老婦人の乗る車いすを二人で押す老人の姿を見掛けました。日本でも同様な出来事が広がり、高齢者が安心して楽しく暮らせる社会が必要であると感じました。これからも多くの人に関心、注意を向けていきたいと思います。また、ご指導いただいた先生、大学関係者方に心より感謝申し上げます。

大田原キャンパス歓迎会の様子

本学では、今年度も大田原キャンパス三名、東京青山キャンパス九名の留学生を迎えました。大田原キャンパスでは、ささやかですが、今年から新たに私達の仲間に加わった留学生を囲んで歓迎会を実施しました。

今号では、青山キャンパスで研究をする大学院生二名の声をお届けします。

アンさん（左）と姜珠賢さん（右）

姜珠賢（강 주 현）（カンジュヒョン）さん（韓国）

医療福祉経営学分野博士後期課程二年

韓国のソウル出身です。本学では、日本と韓国の医療機関に対する評価の比較研究を進めています。将来は、韓国に帰り、大学で医療マネジメントの研究を続けたいと考えています。

今日は、皆さんに韓国旅行の際に役立つ表現を一つご紹介します。韓国の飲食店で食事をすると、頼んだ料理とは別にキムチなどの「つきだし」が出てきます。多い店だと、二、三品出てくることもあります。しかも、この「つきだし」は無料です。さらに、おかわりも自由（もちろん無料）なんです。「おかわりがほしいな」と思った時は、

〝**○○ 더 주세요**.（○○ト チュセヨ）〟

と言います。「もっとください」という意味です。キムチがほしいときは、

〝**김치 더 주세요**.（キムチ ト チュセヨ）〟

と言えばOKです。皆さん、ぜひ韓国に遊びに来てください。

グェン・ティ・フォン・アン（Nguyen Thi Phuong Anh）さん（ベトナム）

医療経営管理分野修士課程二年

私は、ベトナムのHai Duong（ハイ・ズォン）という街の出身です。Hai Duongはハノイから車で一時間ほどの街です。将来は国の大学で研究を続けたいと思っています。

私も、ベトナム語のフレーズをご紹介します。ベトナムは暑い国なので、旅行中アイスが食べたくなります。でも、カップアイスを買うときは注意が必要です。お店でカップアイスを買っても日本のようにスプーンがついてこないのです。そんな時は、

〝Cho toi cái thìa.（チョ・トイ・カイ・ティア）〟

と言ってみてください。「スプーンください」という意味です。今年、海外保健福祉事情でベトナムに研修に行く学部生の皆さんは、これでベトナムの暑さを乗り切りことができると思います。

学生投稿ページ The students' contributions

06

今回のテーマ

震災ボランティア活動

本学では、大田原キャンパス内ボランティアセンターが中心となり、震災発生直後の三月一四日より「災害ボランティアプロジェクトチーム」として活動を開始しました。

避難所ボランティアの様子について

医療福祉・マネジメント学科3年　菅原愛美

避難所で子どもたちと遊ぶ学生ボランティア

国際医療福祉大学災害プロジェクトチームの活動の一つに避難所でのボランティアがありました。各地区に設置されていた避難所の中で、私たちは主に大田原市湯津上地区・那須塩原市・那須町の避難所に訪問させていただきボランティア活動を行いました。具体的には、避難されている方のお話相手、お子さんの託児（こっぷく遊び隊）、ニーズ調査、炊き出し、足湯などの活動を行いました。

私が主に活動していた那須塩原市の西那須野健康長寿センターには畳の休憩室があり、避難者の方々は「前にいた避難所と違って過ごしやすい。本当にありがとう」と言ってくださる方がたくさんいました。また、地域住民の方々や社会福祉協議会によるさまざまな支援、そして避難してきた方々同士の助け合いによって、避難所の様子が徐々に明るくなっていくのを実感しました。

しかし、震災による津波の影響で家を失くしてしまった方や放射能の影響で家があっても帰ることのできない方、家族の安否確認ができていない方など、避難されている方々の多くは、深刻な悩みや不安を抱えておられました。このような大きな問題を抱えている方々の声に、私たち大学生のボランティアではどうしようもできない歯がゆさを感じたりもしました。

このような複雑な気持ちを抱えたこともありましたが、避難されている方々のお力に少しでもなれるよう、お話相手やお子さんの託児、足湯などの活動を継続して行わせていただきました。

これらの活動の中で、逆に私たちが、子どもたちから笑顔と元気をもらい、避難されている方々のお話から『震災』が与える影響の大きさや、大きな傷を背負いながらも助け合いを忘れずに、亡くなった人たちの分まで生きていかなければならないという強い気持ちを持つことの大切さを学ばせていただきました。

『ボランティア』としての私たちを快く受け入て下さり、正直な気持ちを吐き出してくださった避難者の方々との出会いに感謝し、活動を通して学んだ、「助け合い、思いやることの大切さ」を忘れずに、これからの学生生活を過ごしていきたいと思います。

東日本大震災を経験して

作業療法学科4年　植田　悠

今でも地震発生時の記憶が鮮明に思い出されます。当時私は福島県相馬市に帰省しており、発生時は仙台市にいました。発生後しばらくして避難所に向かい、そこで偶然会った同級生も含め八人程のグループを作り帰る手段などを検討していました。情報がないため津波が来たことは当初全く分からず、号外で地元が被害に遭ったことを知りました。当分帰れないことを覚悟していましたが、同級生の母親が避難所まで車で駆けつけ、それに同乗させてもらい奇跡的にその日のうちに実家に戻ることができました。その後、福島第一原発の事故が発生し、避難には至りませんでしたが、放射能という恐怖からどうしていいかわからず、家の中にしばらく籠っていました。原発の状況が悪化してからは、弟と共に大田原に避難して、原発が落ち着くまで滞在しました。他の家族が福島に残ることは家族全員で決めたことでしたが、危険な場所に家族を残すという決断はとても辛く、何もできない自分をずっと責め続けていました。

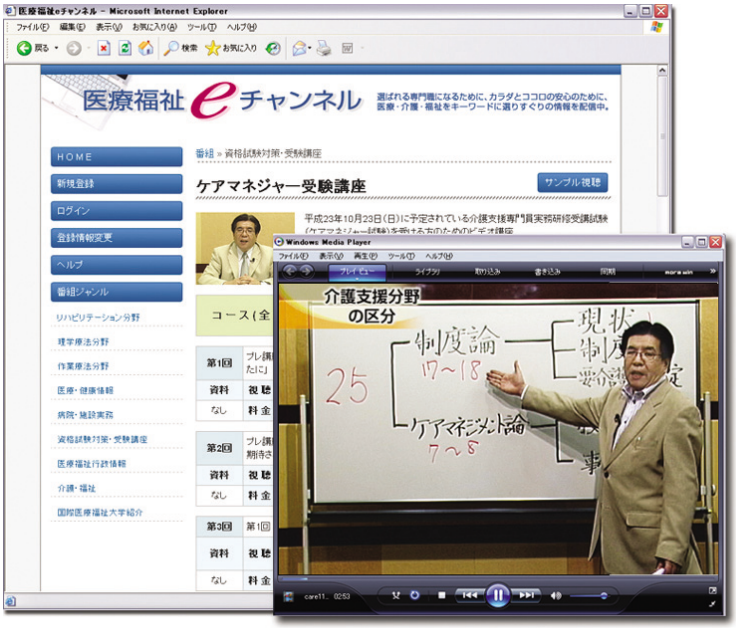
一方、大学ではリハビリテーションセンターのボランティアセンターを拠点に、学生主体の災害プロジェクトチームが結成され、避難所訪問や物資の収集などを行っていました。学生が自ら基盤を作り組織を動かしている姿を見て、私自身前に進む勇気をもらいました。

新学期が始まると、大学の被災地支援プロジェクトが始まりました。行き先は宮城県の岩沼市で、相馬市からも近く、何度も訪れたことのある土地でした。新学期に入ってからずっと、何をすべきなのかを考えていましたが、同じ立場の方々の力に少しでもなりたいという思いで、ボランティアへの参加を決意しました。ボランティアには約二〇数名の学生が参加し、市の沿岸部に近い農家の畑で、流れついた泥を撤去する作業を二日間かけて行いました。農家の方は農業で生計を立てていましたが、津波で作物が全て流されてしまった上、泥を撤去しなければ塩害により作物が育たなくなるため、早急な対応が必要でした。畑は広大でしたが二日間で全て撤去し終わり、学生の底力を見ることができました。持ち主の方にお話を伺うと、津波が来たときの様子などを私たちに語ってくれました。また泥が無くなったことをとても喜んで下さり、支援を行うことで生み出せる力の大きさを実際に感じることができました。

２日間にわたる泥の撤去作業

医療福祉eチャンネル [http://www.ch774.com] インターネット動画配信中

インターネット「ビデオ・オン・デマンド」方式にて、医療・介護・福祉をキーワードに、
選りすぐりの情報をお届けしています。
いつでも何度でもお好きな時間に視聴可能です。



自立支援ケアマネジメント・自立支援介護

ケアマネジャー受験講座

主な配信番組

●**大学授業・副教材**
心理学、文学、演劇論、疫学・保健医療統計学、死生学概論、世界遺産と国際文化政策、関連職種連携論、ＰＴ動作分析論、生理光学、公衆衛生看護活動シリーズ、産業看護の基礎、視能訓練学Ｉ

●**医療・健康**
医心伝心、ボイス～医療の扉をノックする～、緩和薬理フォーラム、よりよい治療のために～肺がん～、創作劇「空白のカルテ」、黒岩祐治の製薬会社トップに訊く！、放射線と人体への影響、脳科学と再生医療・遺伝子治療の最前線

●**介護・福祉**
役に立つ福祉用具の今日・明日・未来、床ずれの防止とケア～基礎から用具まで～、地域包括ケアの理念と現実的展開の方向性

●**資格取得受験講座**
ケアマネジャー受験講座、介護福祉士受験講座、社会福祉士受験講座（予定）

●**病院・施設実務**
自立支援ケアマネジメント・自立支援介護、よくわかる！医療福祉実務、看護生涯学習講座、地域連携コーディネーター養成講座、医療と福祉の連携、ケアマネジメント・認知症ケア・介護予防のための講座、東日本大震災・私たちは何をすべきか、病院再生研究会

●**リハビリテーションアワー**
第46回日本理学療法学術大会（宮崎）、日本理学療法士協会・日本作業療法士協会主催の学会・研修会、作業療法士現職者共通研修

●**厚生労働省課長会議**
厚生労働省障害保健福祉主管課長会議（平成23年6月30日開催）

●**お問い合わせは**
フリーダイヤル　0120-870-774　医療福祉ｅチャンネル お客さま係（月曜～金曜 9:00～17:00）
Ｅメール　info@iryoufukushi.com　HP　http://www.ch774.com　〒107-0062 東京都港区南青山1-3-3 青山一丁目タワー4階

広報誌 IUHW 86 号

発行：学校法人 国際医療福祉大学
〔大田原キャンパス〕広報委員会
栃木県大田原市北金丸 2600-1　☎0287-24-3000
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山 1-2-25　☎0465-21-6500
〔福岡天神キャンパス〕
福岡県福岡市中央区長浜 1-3-1　☎092-739-4321
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津 137-1　☎0944-89-2000
〔東京事務所〕広報室
東京都港区南青山 1-3-3　☎03-5775-2505
デザイン：iDept.
編集：東京事務所広報室

© 国際医療福祉大学　2011 Printed in Japan　禁無断転載・複写

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学